

C. バレンタイン著

『文化と貧困：批判と対案』

Charles A. Valentine, *Culture and Poverty: critique and counterproposals*

The University of Chicago Press, 1968, pp. xiii+216

“Culture of Poverty” (貧困文化) という用語はまだ生れて日が浅い。バレンタインによれば、これは Oscar Lewis の造語で、彼の *Five Families: Mexican case studies in the culture of poverty*, 1959. の中で初めて使われ、M. Harrington の *The Other America*, 1962. を通して広く普及するようになったもののようである。ハリントンは「合衆国における貧困は、一つの文化、一つの生活様式となっている」「貧乏であることは、この国における一個の人間の生活の一面ではなくて、彼の人生なのである。全体としてみれば、貧困は一つの文化である」といって、アメリカにおける新しい貧困問題を鋭く指摘した。これが “War on Poverty” (貧困との闘い) の先鞭をつけた事実を忘れてはならない。またハリントンと並んで、貧困を優れた筆致で描写してきたのがオスカー・ルイスであり、彼の業績も高く評価せねばならない。Thomas Gladwin もルイスが科学的貧困研究の先駆者であることを認めている。そこでバレンタインに与えた影響も大きいルイスについて触れておこう。

ルイスは、1943 年以來メキシコの農村研究に従事し、1951 年に *Life in Mexican Village: Tepoztlan restudied* を著わし、当時最もすぐれたコミュニティ・スタディとして注目された。そして、テポストランからメキシコ・シティへ移住していった人々の生活を追って研究を続けるルイスは次々と新しい家族研究領域を開拓していった。“*Five Families*” では五つのメキシコ人家族をとりあげ、それぞれのありきたりの 1 日の日常生活を詳細に描写している。さらにこの五つの家族のうちの一つ、メキシコ・シティの都市スラムに住む Sánchez 家族に焦点を合せて書かれたのが *The Children of Sánchez*, 1961. である。ここではサンチェス家の家族 1 人 1 人の生い立ちを彼らの言葉で語らせている。ルイスはこれを「複合的自伝の方法」(the method of multiple autobiography) と呼び、また同じ出来事を何人かの者がそれぞれの眼を通して語るという意味で「羅生門的手法」とも呼んでいる。いずれにせよ、このように家族成員全員

の後も同じ手法で、急激な文化変動を経験しつつあるメキシコ農村家族の分析を行ったり (*Pedro Martinez*, 1964), ニューヨークの都市スラムに生活する家族を描いたりしている (*La Vida: A Puerto Rican family in the culture of poverty*, 1966). 後者の作品はピューリッツァ賞を受賞しており、ルイスが広範な読者層をもっていることが知られる。

オスカー・ルイスはこれら一連の研究を通じて「貧困文化」の理解を深めることに努めてきた。彼にとって家族は、文化と個人との媒介項であり、家族研究を通して「貧困文化」にアプローチしようとするものである。まだ理論構築は十分とはいえないが、これまで余りとりあげられなかった人々——とくに下層階級——の心理を、彼らが何を考え、何に感じ、何に悩み、何を議論し、またいかなる期待をもち、いかなる楽しみがあるのか、との視点から分析しようとするとき、複合的自伝の方法はこれらの諸点を克明に描き出してきたといえよう。

もちろんこうしたルイスの方法に対する反論もある。*Current Anthropology*, Vol. 8, No. 5 (Dec. 1967) は、『サンチョスの子供たち』『ペドロ・マルティネス』『ラ・ビーダ』の三書に対する誌上合評会を行っている。ここでも、ルイスの著作は科学ではなく文芸作品である (Beattie) といった批判が浴せられている。しかし、それは literary realism とは違った ethnographic realism の極致を拓いたとみることもできよう。

いろいろ評価はあろうが、オスカー・ルイスの「貧困文化」理論のメリットは次の点にあるといえよう。(1) 貧困問題に「文化」概念を導入したこと。文化が世代から世代へ受け継がれていく生活構造を意味するのと同じく、貧困もまた世代から世代へと受け継がれていく生活様式である。その意味で貧困も一つの文化である。(2) 貧困文化の普遍性を主張したこと。貧困文化は地域的、田舎—都市的、あるいは民族的差を越えた資本主義社会に普遍的な諸特性をもつ。このことは、従来ある特定の民族集団や地域集団の行動パターンを、その集団に具わった特異なものとする偏見を打破した。(3) 貧困文化にポジテ

イブな側面を認めたこと。現代における貧困は、単に経済的窮乏、秩序の混乱、あるいは何らかの欠乏というだけではない。それなくしては貧困者の生活に支障をきたす、その意味で貧困が防衛機構となっていることがある。

少しくどくどとオスカー・ルイスの業績について触れてきたが、それは本書が、貧困研究における新しい領域を開拓してきたルイスを高く評価しながらも、これ乗り越えようとしているからである。

バレンタインはワシントン大学の人類学準教授で、フイルド・ワークの経験は余り多くなく、ニューギニアへ2回ほど調査旅行している程度のようなものである。したがって本書はもっぱら文献研究を旨として構成され、副題の「批判と対案」が示すように、これまでに発表された貧困と文化（生活様式）とに関連する諸説に検討を加え、新しい対案を提示せんとする意欲的著作である。貧困文化という言葉がまだ十分定着せず、誤解されている面も多いとすれば、本書のように貧困文化にかかわる理論的整理を行っておくことはきわめて有益である。

本書の構成を示せば次の通りである。

第1章 序論：文化概念の導入と濫用

第2章 自己永続的下層階級：文化的イメージとその政策への反映

第3章 国際的「貧困文化」に対する社会科学及び社会政策からの意味づけ

第4章 従来の貧困者イメージに対する挑戦の開始

第5章 複合社会の人類学的研究：新しい理解のための方法と展望

第6章 結論：貧困及び貧困者の現状と未来に対する見方

補論 不平等解消のために貧困者に権限を付与する提案

付録 今後の民族誌学的調査研究の構想

第1章では、貧困と文化という基本概念についての考え方が述べられている。

文化には普遍性、組織（結合力と構造）、創造性の三つの側面がある。もっとも簡約していえば、文化とは人間の生活様式全体であり、行為を生み、導く規則である、ということになる。

貧困については、その本質を“不平等”すなわち、相対的な権利剥奪（deprivation）に求めている。富裕者には具わっているものが貧困者には欠けている。その意味で物質的不平等が存在する。とくにアメリカでは、イデ

オロギー上の諸価値が“平等”を非常に重んじている。一方、現実には貧困者は、職業、教育、政治的勢力などの広範な領域にわたって不利益を被っている。そこに社会問題としての貧困を文化との関連でとらえる場合の鍵がある。また従来の貧困研究を検討してみると、貧困問題を論ずる視点が中産階級の側に偏っているという問題がある。そこで著者は、貧困文化ならびに関連概念が貧困者の生活の現実をいかに歪め、そのためにわれわれの貧困者に対する理解がどれだけ阻害されているか、またその結果、貧困者の不利益を放置してきた政策にどれだけ肩入れをしてきたか、などの点を鋭く弾劾している。

第2章では Franklin Frazier, Nathan Glazer, Daniel P. Moynihan, Walter Miller, David Matza が祖上へのせられている。ここにあげた5人は、貧困と黒人とを同一視していること、貧困は貧困者自身の責任であって、その救済手段は貧困者自身の中に求めるべきだと主張する点で共通している。

フレイザーは、黒人社会に一貫した文化体系があることを否定し、黒人の貧困のイメージを解体と絶望という言葉で表現した。それは世論も社会統制もコミュニティの規則も存在しない社会現象が累積した社会である。このようなイメージがその後の「下層文化」「貧困文化」概念に与えた影響を見逃すことはできない。

グレイザーもモニハンもフレイザー理論の後継者である。現在の貧困原因は“職務上の無能力”、“教育成果の欠如”にあり、その責任は貧困者の家庭、コミュニティが負わなければならない。ここでも自助、自省といった「自惚れたエリートの独断」が幅をきかせている。

モニハンはまた、彼の“モニハン・リポート”が大統領演説の基調をなしたという意味で、フレイザーの伝統——下層文化概念——を政策に反映させたことになる。彼の主張は安定政治（politics of stability）路線を行くもので、貧困原因は家族の構造にあるから、黒人の家族構造の安定化を計るべきであるという。そのための施策として、完全雇用、訓練および再教育、家族（児童）手当などを提案している。

これに対してバレンタインは次のような批判を加えている。——例えば、家族手当は真の貧困者救済策たりうるのか。計画では全ての子に平等の給付をすることになっている。しかしこれでは、貧困者が全人口の4分の1だとすれば、家族手当支給金の4分の3は貧困者以外のものを潤すことになる。それでは実質的な貧困対策になりえないのではないか。階層間の再配分といっても、結局は現状を固定化するだけではないのか。

以上のような議論から次の二つの傾向を指摘することができる。(1)中産階級が貧困に対して抱くステレオタイプと、貧困文化という学術用語がもつイメージとが類似している。(2)非貧困者が定義し、価値判断を下すので、貧困者は社会の安定と公共の秩序に対する脅威とみなされる。

このことを端的に示しているのがミラーである。ミラーは下層階級の特性を示す 12 の中心課題を設定し、そのうち trouble, toughness, smartness, excitement, fate, autonomy の六つを下層階級の非行と犯罪の原因であるとした。これらはいずれも貧困者自身の内部にある原因である。貧困者の文化類型には一切触れず、非貧困者の価値と利己主義だけが表現されている。

マツタは窮乏化理論を用いながら、貧困者を救う責任が非貧困者にあるとは考えていない。それは貧困者自身の内的資質にかかわる問題であり、解決策は貧困者自身が仕事の価値を学び、勤労を愛する「安定した労働者家族」を目指すことだという。しかし、こうした方策が貧困、不平等を除去しえないことは明らかであろう。結局は「不熟練労働者のプール」をそのまま維持するだけではないのか。

第3章ではオスカー・ルイスの貧困文化理論が検討されている。

ルイスは貧困を中産階級との比較的視点から見るのでなく、建設的、人道的立場に立っているという点で前章の諸氏とは異なる。また文化の中核は積極的、適応的機能であるとの視点から、貧困文化の中にある適応メカニズムを中心として分析を進めている点でも特異な存在である。

ルイスは、貧困そのものの根絶よりも、貧困文化の根絶の方が困難である、しかし、まず貧困文化の根絶に取り組むべきである、と繰返し主張している。これに対してバレンタインは、なぜ容易な貧困の根絶から片付けないのか、との疑問を投げかけている。これはルイスが地道な人類学的調査から得た教訓だといえよう。貧困者が何人いて、いくら金をかければ貧困者はいなくなる、という問題ではなしに、貧困者の生活様式全体の問題として考えなければ本当の解決にならないとの主張として受取るべきであろう。したがって貧困者の物質的欠乏を補う前に、貧困者の文化を問題にしなければならない。ルイスはこれを精神医学との連携に求めている。それが社会事業・精神医学アプローチ (the social-work-cum-psychiatry-approach) であり、貧困者の中産階級への編入をねらっている。これは中産階級的価値を体得させる

ことを主張してきた下層文化論者と同じで、その点では貧困文化と下層文化との差違は見出せない。相違する点は、社会経済的独立をいかように達成するかという方法の問題である。また貧困文化の特性が、集団解体、個人解体、諦観、宿命、目的的行動の欠如などだとすれば、そんな特性を具えているのは精神病院の慢性患者ぐらいしかいない。それではせっかく貧困文化にポジティブな側面を認めた意義も失われるし、またそのような集団に人間の創造性といった高度の価値を認めるわけにもいかないのではないか。

その他、ルイスの方法論をめぐる疑問、理論モデルと具体的事実との乖離、分析レベル間の相互関連性、典型と代表との問題などが指摘されている。しかし、貧困文化を“参加”の欠如という側面から捉えていることは注目すべきであろう。意識が下ったり、関心がなくなったりするために参加しないのではなく、意識が高く、関心はあっても参加できない。すなわち参加を阻む要件がある。それは貧困者全体の生活を取りまいてる外部社会に原因がある。

第4章では貧困者に対する新しい捉え方をしている Kenneth Clark, Charles Keil, Thomas Gladwin, Eliot Liebow の4人の所説が紹介、検討されている。

クラークは統計分析の欠陥を認め、ハーレムを理解するには真実を探求し、見出した真実を受容し理解せねばならないとの信念のもとにハーレムの実態調査を行った。その結果、「文化逸脱の礼讃」は、それが「魅力的」だから起ることを明らかにした。またクラークはゲットーにも健全性と強さがあることを認め、それに基いて団結心と社会参加による建設的な下位文化変動が起ることを期待している。それは貧困者の自己変革だけに依存するのではなしに、不利な立場にあるコミュニティと一般社会とを結びつける制度体——例えば公立学校——の変革をも含んでいる。

カイルは、黒人には文化など存在しないという従来の考え方に鋭く反発し、黒人文化にポジティブなヴィジョンを持たせようとしている。そして中産階級の価値も黒人文化の枠組の中では逆転することがあることを認めている。しかし、問題の解決には統合ではなしに、選択の余地のある自由が必要であり、そのためには真実追求の聰明さを育てる学齢前教育計画の充実が望まれるとの主張は、ルイスのいう社会事業的解決策と何ら変らない。

グラッドウィンは、貧困者の逸脱した生活様式が外部社会との間に逆機能的関係を作り出している点に注目している。したがって貧困者を何とも手に負えないクライ

メントとして扱うのではなく、逆機能的下位文化を有する集団としてみる必要があり、そのためのプログラムは、文化変動、すなわち生活様式全体の変化を志向したものでなければならない。具体的には、(1)伝統的福祉計画に代る所得保障、(2)現行退役軍人給付の改革、(3)雇用の拡大と合理化、の三つを現在の“貧困との闘い”に追加するよう提案している。要するに問題は、全体社会体系内部のパワーの再配分をどうするかにかかっている。

またリーボウは、貧困の中心原因を下層黒人男子が世帯をもち、家族を扶養するだけの手だてを与えていない点に求めている。その改革には、単に貧困者の生活様式の変化を目指すだけでは十分ではないとして、“貧困との闘い”の欠陥を鋭く衝いている。

第5章では、都市文化人類学者オスカー・ルイスを中心に、複合社会への人類学的アプローチについて述べられている。ルイスの家族民族誌的手法を高く評価しながらも、科学としてはインテンシブ・リサーチ——仮説の設定——数量的研究による検証、の3段階を充実していくことが必要だとしている。またルイスが「都市住民をリトル・コミュニティの成員として研究することはできない」として、都市のコミュニティの存在を否定し、家族研究に没頭したのに対して、スラム・コミュニティの存在を主張した Harbert Gans をとりあげている点は、著者がルイスの家族民族誌にあきたらない感じを抱いていることを示している。

下位文化概念についてはいろいろいわれてきたが、その中で見落されていた点として次の三つを指摘している。(1)下位文化の特色だけではなく、構成要素全体を平等に扱う。(2)構造上の特色の原因は下位社会の内部ばかりではなく外部にもある。(3)下位文化の性格は経験的調査を通して明らかにされる。これらは当然今後の研究に生かされねばならない。

またルイスが提示した 70 の貧困文化特性を集約して、(1)貧困の全体指標あるいは相関、(2)行動の類型と関係、(3)価値と態度、の三つのカテゴリーを抽出している点も注目される。

最後にルイス、ミラー、ガンスの三者の貧困下位文化概念について、それぞれの仮説と命題とを掲げ、それに対する対案を提示するという形で検討が加えられている。

ルイスの主要仮説は、貧困文化が家族内で世代から世代へと受け継がれていく生活様式であるという点にある。これに対して対案では、最低所得階層の生活パターンは、彼らのコントロールのきかない上位社会の構造条件によって決まるのであって、家族のような第1次集団での社

会化が中心をなすとは考えられないと主張している。その他ルイスの命題としてとりあげられているものだけを示せば、(a)参加の欠如という特徴は貧困文化を内側から支えている。(b)上位社会での支配的価値は知識に留まり、現実の行動には生かされない。(c)地域社会の構造は世帯以上のレベルには存在しない。(d)家族の構造およびプロセスは不安定で解体している。(e)個人の一体性は弱く、性格は分裂し、視野が狭い。

ミラーの主要仮説は、下層階級の生活様式は一連の中心課題によって特徴づけられ、下層階級の関心事項は非行と犯罪の多発を生み出すという。そして先にも示した trouble, toughness, smartness, excitement, fate, autonomy の六つの命題について検討されている。

ガンスの主要仮説は、階層とは関係、行動類型および態度が社会・文化(下位)体系と結びついているとの仮定に基づく下位文化であるという点にある。対案では、階層は下位文化というよりも下位社会(構造上の単位)なのではないか、また階級間の差違では、全体社会内部の社会・経済・政治的立場の方が重要ではないのか、などの点が指摘されている。命題では、(a)下層階級の下位文化の特色は女性中心家族で、男は周辺的存在である。(b)男性は愛情の交換だけに参加して、子供の養育はほとんどしない。(c)男女の役割の分離が徹底し、しかも矛盾している。(d)男性にとって生活の予測は不可能である、といった点について詳細な検討が試みられている。

結論では以上の検討の上に立てた次の三つのモデルが提示されている。

モデル1：欠陥のある不健全な下位文化をもつ自己永続的下位社会——下層階級貧困者は別個の下位文化をもつが、それは中産階級の病理的形態である。したがって貧困下位文化は中産階級文化あるいは労働者階級文化に同化すれば消滅する。そのためには貧困者が大多数を占める低開発諸国では革命が有効であるが、そうでない西欧では社会事業、精神医学、教育を通して行われる文化変動によってもたらされる。

モデル2：外部から圧迫を受け、下位文化が食いものにされている下位社会——下層階級貧困者は構造的に異質な下位社会であり、生活上の病理、歪みなどの原因は、貧困者への資源を拒否している全体社会の構造と過程とにある。したがって貧困を根絶する前に全体社会の構造を根本的に変革し、資源の再配分を行わねばならない。その方法としては、有利な立場にある上位階層が進んでその利益を分とうとしない現在、貧困者の代表者による権力への革命的接近によらざるをえない。

モデル3：諸種の適合的下位文化をもつ異質的下位社会——下層階級貧困者は、特色ある下位文化類型をもつ。そしてその類型は病理的特性だけではなく、権利剝奪の事態に創造的に適合しようとする健全でポジティブな側面をもつ。また貧困者の構造上の位置と下位文化類型は、歴史的ならびに現代的所産である。変革は、貧困者向け資源の増大、全体社会構造の変革、下位文化類型の変化、の三つを同時に、相互に補強しあいながらおし進める。その手段として文化復興運動が考えられる。現在アメリカで進められている市民権運動はその原型を示している。

モデル1は現代のアメリカで中心的位置を占める考え方であり、社会事業的アプローチと呼ばれるものである。それに対してモデル2は、ラディカルな変革を目指す革命的アプローチである。モデル3は両者の折衷案であり、社会運動的アプローチとも呼べよう。バレンタインの提唱するモデルは、アメリカの市民権運動から多大の示唆を得ており、さらにこの運動を発展させようとの意図が感受される。

バレンタインは、モデル3を推進するためにはまず貧困者の真の姿を描いたエスノグラフィが必要であり、そのための新しい人類学が現われねばならないとしている。それは、中産階級の下位文化から知的にも、情緒的にも独立した視点に立って、貧困者が何を欲し、何を考えているかを内側から分析することである。さらに下位文化との関連をもつ諸機関の計画や政府の政策をも研究領域に含めるという点でルイスの手法を一層発展させ、エスノグラフィと統計資料、社会政策との総合化を計らんとする広い展望をも与えてくれる。

本書は貧困問題に関連して、それを学問的に研究しようとする研究者の姿勢、問題解決に当る政策者の姿勢、あるいは学問的研究成果と政策との連繋などについて多大の示唆を含んでいる。その根底には複合社会を研究対象とする人類学徒の熱烈なる意欲が感じられる。すでにルイスは、「人類学者は伝統的には世界の遠く離れた片隅にいる未開民族の代弁者であった。しかし今やそのエネルギーを低開発諸国で大多数を占める農民や都市の大衆に注ぐようになった」として、人類学における研究動向を位置づけている。そして自ら都市貧困者の代弁者た

らんと志した。バレンタインもこのルイスの行き方を是認している。それは、貧困者のもつ文化を一つの下位文化と考え、この文化（貧困文化）を貧困者自身の立場から究明しようというものであり、貧困研究をより実りあるものにしていくことが期待される。

一般に相異なる二つの文化が接触した場合、文化は変容すると考えられる。この過程を文化変容 (acculturation) という。では貧困文化の場合はどうであろうか。上位社会（中産階級）の文化と接触しながらも、貧困文化はなかなか変化しない。むしろ上位社会の文化が貧困文化の変化を抑えている。そうすることによって上位社会の存在基盤が安定している。こう考えると、貧困問題を貧困者内部の問題として片付けることはできない。当然全体社会の構造との関連で考えねばならない。しかもつねに中産階級的予断（偏見）は排除してかからねばならない。

バレンタインは貧困問題解決のための展望を市民権運動に見られるような社会運動に求めている。それは長い長い途のように思われる。何よりも黒人に対する迫害、いやがらせなどが半ば公然と行われるアメリカ社会のアメリカの民主主義の価値前提を徹底的に糾弾することなくしては、貧困問題解決のための糸口さえつかめないのではないだろうか。

最初に断わったように、何分とも本書は貧困と文化に関する緒説の理論的整序を目途として、人文科学における事実発見、体系的知識、理論構築の領域と、社会政策、政治、イデオロギーの領域との連携を計ろうとする試みである。その背景には、現在の貧困問題が惹起する政治、イデオロギー闘争が社会の将来を決定するのではないか、またこうした分野への学問的寄与は重要な意味をもってはいるが、従来の専門家の意見はむしろ有害でなかったか。もしそうであるとすれば、そうした従来の諸説に批判を加えることは市民の1人としての義務ではないか、といったバレンタインの発想があった。本書はその使命を十分果しているといえよう。

今後はバレンタインの提唱しているモデルに沿った実証研究が行われることが切望される。現在バレンタインは都市の黒人ゲットーでのフィールド・ワークを準備中だという。その成果のほどが期待される。

(花島政三郎 社会保障研究所員)